季語より見た時代と俳人の特色について

大野香代

はじめに

従来、俳句の特色といわれているのは、

一、五音七音五音の三句十七音であること

二、季語を含むこと

である。

子規没後、この制約をきらい、自由律、無季を唱える新傾向派が台頭してきたが、私はやはり俳句の生命は季語にあると思う。四季の風物を鋭敏に感受する日本民族の特異性は世界に誇り得るものであるし、その季節感を巧みに十七文字に詠みこんだ短詩形文学も又、世界的な文学価値を持っても当然であるように思う。

しかし、ここで考えられることは、悠久な自然に対する俳人の態度、感銘は今も昔も変らないのであろうかということである。花に酔い、月を賞でる詠句の態度は今も昔も少しも変っていないのであろうかということである。

河東碧梧桐はこの季感について、

総ての自然感、季感も、亦た大体かやうに、一般性、伝統性、実在性、想化性と時代又た個人によって変化し推移するもののやうに思はれます。ですから、或天才の創作によって、飛躍的な変化を来す場合もあり、又た時代の思想趣味性によって、いつの間にか変化してゐると言った事も有り得るのであります。

と言って、元日と年の暮が転倒したり、梅の花が牡丹の花になったりするやうな混乱が発生し得るとは考へられません。季感もその先天性が失はれ、無限の後天性の変化を見るものとも想像されません。ここに季感の恒久性と流転性といふことが明らかにされるやうであります。元日感はいつまでも元日感であり、梅は梅、牡丹は牡丹、其の季感に或不動のものもある。それが恒久性であり、その恒久性の上に派生して行く時代又たは人によって生ずる変化、それが流転性であります。

本来季感も、人生と共に生きてゐるものであり、死灰と同じに不動固定のものではありません。昔の歳時記を見ますと、何々神社の祭日とか、何々寺の供養といふやうな項目が沢山あります。が、今日ではもはや過去に属して何等の感興をも惹きません。これらは大きな季感の動きで、概

念的に季感及び季語の流転を示してをります。さういふ流転は、神仏の祭日ばかりでなく、自然の草木禽獣にも亦た有り得ると想像していいと思います。

〔註一〕　と述べている。

彼の言のように季語が時代的に変遷し、個人による差異があるかどうかはこれからの統計に待つところである。しかし、新らしく外国からはいってきた動物、植物等による季語の時代変化は特別だとしても、俳句が生まれる以前から存在している月、雪、桜、菊……等々の時代変遷を辿ることは面白いことだと思う。わずか十七文字の中に占める季語の割合は非常に大きいものであるから、季語に対する俳人の関心は高いと思われる。ゆえに各季語の使用度から俳人の特色をみることが出来るのではなかろうか。

ここでは紙数が限られているので、最初に季語の全体的な統計と、季語の時代的変化をのべ、次に、研究対象として選んだ十一人の中から、特に大正末期の新興俳句運動に活躍した日野草城・山口誓子・水原秋桜子、又この運動に続いて昭和十三〜十四年頃に活躍した中村草田男など現代の四俳人の特色についてのべてみることにする。

一、季語よりみた時代

(1)　時候・天文・地理

まず十一人の時候・天文・地理に関する季語の全体的な統計をとったのが次の表である。

表　一

1	月	321	5	涼し	92	9	秋の暮	76
2	雪	225	6	露	90	10	春雨	73
3	時雨	124	6	秋	90			
4	梅雨	112	8	秋風	88			

この表でみると圧倒的に多いのが「月」である。「月」は古来歌によまれ、詩によまれているが、俳句ももともと和歌から発達した連歌の発句であるという性質上、和歌に多く歌われている「月」が多いのも肯ける。芭蕉は時候、天文、地理の部門では、四季の中では、春二四句、夏七一句秋一五六句、冬一三一句で、秋が一番多いが、その秋の季語の中でも「月」は四六・二％と約半分を占め、芭蕉の「月」に対する関心が高いことが窺われる。又、其角も芭蕉に続いて多く、次の蕪村との間に大きな差をつけている。芭蕉・其角・蕪村・一茶等江戸時代の四俳人の中で、蕪村から急に「月」の使用度が落ちたのは何故だろうか。

まず、他の季節の月との関係から考えてみることにする。

表　二

	芭蕉	其角	蕪村	一茶
秋の月	72	52	42	24
他の季節の月	7	6	18	12

表二によつて芭蕉・其角においては「秋の月」が断然多

く、その他の季節の「月」は非常に少ない。しかし、蕪村・一茶になると「秋の月」は急激に減少するが、そのかわりに他の季節の「月」が詠まれるようになる。

このように芭蕉・其角では、「芭蕉俳諧の全体的素地（心の地）は大部分伝統和歌のなかで育てられたものと言ふことが出来るであらう。」〔註二〕と述べられているように心の地はともかく、素材そのものが和歌の伝統を引いていることが「月」の場合にいえるのではなかろうか。蕪村以後は、月は「秋の月」であるという固定概念にとらわれず、詠句の対象の範囲を広げつつ、そこに和歌からの独立を目ざそうとする気運を見ることが出来るように思う。

全体的に季語を眺めた場合の特色としては、一位から三位までを占めている「月」「雪」「時雨」は、芭蕉・其角・蕉村・一茶までは、蕪村を除いてはその順序がいくらか違っていても三位までを占めている。子規以後は虚子を除いて「時雨」を詠むことが少なくなり、草田男は全然詠んでいない。

表三

	時雨	
露		
4	22	芭蕉
3	19	其角
7	13	蕪村
5	22	一茶
6	9	子規
5	7	碧梧桐
7	19	虚子
14	9	草城
21	4	誓子
8	／	秋桜子
10	／	草田男

これと逆に時代が下がるにつれて、わずかずつではあるが次第に詠まれることが多くなっている季語は「露」である。

次に「梅雨」と「五月雨」について考察してみることにする。

表四

	梅雨	
五月雨		
16	1	芭蕉
8	1	其角
10	／	蕪村
7	／	一茶
12	／	子規
3	3	碧梧桐
／	7	虚子
1	15	草城
／	13	誓子
／	47	秋桜子
／	25	草田男

表四をみると碧梧桐を中心としてそれ以前は「五月雨」が多く使われ、それ以後は「梅雨」の使用が多くなっている。もっとも「梅雨」一語だけでは使われておらず、「梅雨の雲」「梅雨の竈」稀に「梅雨のあめ」が使われている。「五月雨」という直接雨を表現している季語は非常に少ないが、背後に長期間にわたるジメジメした季節感を出しているのは「梅雨」も「五月雨」も同じである。ただ現在の私達の生活には「梅雨」はよく口にし耳にするけれども、「五月雨」が口にのぼることは少なくなった。このように「五月雨」という日本独得の季語の持つイメージも、時代がたつにつれて次第に私達から遠いものになりつつある。

(2) 動物

動物についての統計をとつてその十位までを示したのが表五である。現代になるにつれて次第に詠まれることが少

表五

1	2	3	4
時鳥	蟬	鶯	蝶(春)
125	77	60	51

5	6	7	8
螢	燕	こおろぎ	鵙
39	37	33	30

8	10
鹿	きりぎりす
30	29

なくなっている季語は「時鳥」「鶯」「雁（帰雁を含む）」「鹿」「雉」「閑古鳥」「千鳥」「水鶏」である。逆に次第によまれているのは「夏蝶」「灯取虫（蛾）」「蟻」「トカゲ」「鳰」「蜘蛛」である。このように江戸期の俳人に多かった「時鳥」「鶯」「鹿」などの鳥や動物にかわって昆虫類が多く詠まれるようになったのが近代・現代俳句の特徴といえるだろう。

「胡蝶」（春の蝶）」は今も昔も詠まれているものだが江戸時代の四俳人により多く詠まれている。しかし「夏の蝶」を詠んでいるのは現代の俳人の特色である。春の蝶は紋白蝶、紋黄蝶が多く色がはかなく小型である。夏の蝶には揚羽蝶が多く色も多彩で形も大きい。現代になるにつれて多く詠まれている「蛾」や「トカゲ」等々の季語と合わせ考えればここに江戸時代の俳人の特色と現代の俳人の特色の相違がわかるような気がする。

(3) 植物

表六

1	2	3	4
花	梅	菊	桜
192	154	139	124

5	6	7	8
紅葉	牡丹	枯草	萩
67	62	56	52

8	10
柳	柿
52	49

芭蕉・其角・蕪村・一茶までは「花」「梅」「菊」「桜」は常に上位を占めているが、子規以後になるとかなりよまれているとはいえ前記の四人ほどではなく、上位は他の植物にゆずっている。

子規からこれらの季語の使用度が急に少なくなっているのは何故だろうか。彼は江戸後期から明治初期にかけての混沌とした月並調の時代から脱け出そうとして俳句革新運動を起したが、そのスローガンは「芭蕉・蕪村」の時代に帰れ」というものであった。しかしこの統計からみると何も芭蕉・蕪村時代の素材そのものを踏襲しようとするものではないことがわかる。反対に伝統的な季語を駆使することで「俳句たり」としている安易な季題趣味を廃し、芭蕉・蕪村の精神の復活を説いたところに彼の主眼があり、その為には観念上の季語だけに頼らず、自分のまわりにある事物を自分の心でよむことの必要を主張した。実際に子規の植物に関する季語をみると「花」一三句、「梅」六句、「桜」五句よりも多い使用度をみせているのが、「柿」一

五句、「稲」七句、「芋」七句で、彼によつてはじめて新しい季語の範囲が広げられたとみることが出来よう。

碧梧桐になると「花」「梅」「菊」「桜」を合わせてわずか二六句しかよんでいない。

「季題の新しい趣味を見出すといふことは、従来養はれた約束を破毀する趣きがある」〔註三〕と述べているように、古臭い季題趣味を廃そうとする彼の態度はこれらの季語の使用度の低いことからみてもあきらかである。彼の季語の順位をみると「柿」「つくし」「落葉」「すすき」「枯草」その次に「桜」「梅」が続いている。又「たけのこ」「蕗」「むくげ」などの季語も彼の特色である、今まで多くよまれた「菊」「梅」「桜」などの華やかな色彩感にくらべるとこれらはいかにも田舎じみてくすんでみえる。しかし、うっかりすると見過してしまいそうな野山の幸にまで目をとめたのは、従来の季語からの脱皮でもあり、彼の句風の特徴でもある。

(4) 人　事

人事面では時候、天文、地理の「月」「雪」「時雨」、動物の「時鳥」「鶯」「蟬」、植物の「桜」「梅」などのようにきわだって多い季語というのはない。まず五位までをあげてみると「納涼」六七句、「冬籠」五三句、「雛（祭）」四六句、「汗」三九句、「昼寝」三七句となっている。白酒を「雛（祭）」の中に加えると四七句となる。又、粽・幟・菖蒲湯・菖蒲葺く・柏餅・端午を全て「端午」の中に加えると三八句になる。七夕（星祭）も三四句あり、この三つは五節句の中でもよく詠まれているものである。

二、季語よりみた俳人の特色

(1) 時候・天文・地理

誓子は「雪」「雪嶺」「枯野」等々の季語が多いが、その他に彼の特色ある季語は「稲妻」「夕焼」「炎天」である。これら一連の季語から受ける凄惨で壮大な感じはそのまま誓子の厳しく力動性のある句風につながっているといえるだろう。なお「雪」は十一人の俳人の中で一番多く詠んでいる季語であるが、その「雪」を背景としてそこに配されているものは「機関車」や「線路」である。（機関車五句線路四句・駅二句、機関手二句、鉄橋・踏切・汽罐（カマ）それぞれ一句）即ち白と黒との強烈なコントラストの妙を見せている。

秋桜子の特色とみられるのは、

春→春曙（春暁）六句、かすみ七句。

夏→梅雨四七句、夏山の霧一五句、薫風七句

秋→霧九句

で特に「霧」は多く、山に立つ霧、湖より湧く霧、又植物では白樺と一緒に詠んでいるのが多い。このように秋桜子も誓子も山を詠んだ句が多いが、秋桜子の句は、「自然の

大きさやきびしさに人間として立向う」〔註四〕誓子に対して清々しい大気の中で自然の美しさに目をそそぎ、自然の美をそのまま受け入れるようなタイプの句である。

草田男の特色ある季語は、

夏→清水一二句、緑蔭一〇句、虹八句、泉四句

秋→天の川七句

である。誓子の「夕焼」「炎天」など真赤な灼けつくような感じにくらべると、草田男の「清水」「緑蔭」「泉」は火に対する水、赤に対する緑などいかにも正反対の印象を与えて面白い。虹にしても雨あがりの空にかかる淡色の七色の帯はいかにもさわやかで美しい。彼の句を「みづみづしいセンス」〔註五〕と称した香西照雄氏の評が適当であることは、これらの季語からみても容易に肯けよう。

彼等と同時代の草城で他の俳人と違う点は「春の夜」「春の宵」は蕪村の一二句を除くと非常に少なく、草城の一六を頂点としてそれ以後は殆んどといってよいほど詠まれていない。虚子編の『新歳時記』によると「春の宵とは、春の日が暮れてまだ間もない宵のほどで、秋の夜などとちがい、どことなく若々しい和やかさ、明るさ媚めかしさがあり、色彩的な感じにみちている。魅惑的な歓楽的な淡い感傷が漂ってゐるやうにも感じられる」と解説してある。してみると蕪村の句に於ける優美さ色彩感など、こういう季語からのイメージによっても鮮やかに浮彫されていることがわかる。

草城の句を二・三拾ってみると、

「ひるがへるくちびる紅し春の宵」（春芝抄）

「春の夜のくつしたをぬぐ女かな」（青芝抄）

「春の宵妻のゆあみの音きこゆ」（旦暮抄）

などでいずれも誓子・秋桜子・草田男等の句と本質的に異なる句風を示している。女の姿態を詠み込んで豊満さと艶美さを出し、「従来のさび・しをり、俳味といった既成概念から大胆に脱出」〔註六〕している。色でたとえるならば、誓子を黒、秋桜子を透明な白、草田男を緑としてみると、草城はピンクのムードを持った俳人に思われる。しかも、「冬の雪」三句に対し、「春の雪」六句と春の雪を詠んだ句が多いのも彼の特色である。

(2) 動物

誓子は他の全ての俳人にくらべて植物よりも動物を詠んだ句が多いのが特徴である。「こおろぎ」三〇句、「蟬」一六句、「鵙」一五句、「きりぎりす」九句が多いが、彼の特色とみられるのは「夏蝶」一四句、「カニ」一四句、「蟻」一〇句、「蟻地獄」七句、「蝸牛」七句であろう。「春の蝶」よりも「夏の蝶」を好んで詠むのは現代の俳人の特色であるが、その中でも誓子は「春の蝶」四句に対し「夏の蝶」一四句と一番多く詠んでいる。「カニ」「蟻」「蟻地獄」などは一般に美の対象とはならずむしろ醜悪で滑

稽なものである。

草田男が多く詠んでいるのは「蟬」一一句、「燕」七句「鵙」七句である。

これら現代の俳人の中でも一人秋桜子は違った季語を使用している。たとえば「時鳥」二七句、「鶯」一二句、「蜩」七句、「慈悲心鳥」七句、「ひよどり」六句、「瑠璃鳥」五句、「白魚」五句など昆虫類よりも小鳥を詠むことが多く、特に「時鳥」「鶯」「白魚」などは江戸時代の俳人に共通するものであり、秋桜子の著しい古典感覚をこれらの季語からもよみとることが出来よう。

(3) 植　物

草城についてはその順位を示すと、「牡丹」「花」「バラ」「梅」である。「牡丹」「バラ」は従来夏の植物であるが「寒牡丹」「冬バラ」なども詠んでおり、彼の好みが窺われる。草城の次に「牡丹」を多く詠んでいるのは蕪村である。時候天文地理の項でも指摘したように植物でもこの二人は相似点がみられる。「バラ」は外国種の植物であるが、もし蕪村の時代にも色とりどりの大輪のバラがあったとしたらどんなよみぶりをしたろうかとしりたく思われる。草城はこの他にも「リラの花」「アマリリス」「サイネリア」など外国種の植物をわずかではあるが詠んでいる。彼の句から受ける都会的センスはこれらの季語のイメージによるのであろう。

誓子は前にも述べたように非常に植物を詠んだ句が少ないが、その順位を示すと「甘藷」「無花果」「曼珠沙華」「桜」「菊」である。「曼珠沙華」は根に毒を持つ為に死人花・幽霊花とも呼ばれるが、毒々しいほど真赤な花はそういう名称を与えられたとしても少しもおかしくない。

誓子と正反対に秋桜子は「菊」「もみじ」「つつじ」「桜」「椿」「あやめ」「梅」「藤」など古典的なおだやかな季語が多く、特に「葛」「馬酔木」などは江戸時代の俳人にもみられない季語である。虚子編の『新歳時記』によると「馬酔木といふと先づ奈良を思ひ浮べる。（中略）極めて地味な古風な花で近寄ると仄かな香を放つ。」と解説してある。このように古典的な味わいのある季語が多く、諸家に万葉調俳人と評されている。いかにも清純で素朴なよみぶりは万葉調ではあるが、万葉時代の人々のように感情を生のままぶつけるというのではなく、感情を自然の中に包んで、そこに静かで悠久な息づかいを聞くことが出来るといったような俳風である。

(4) 人　事

「汗」は芭蕉・蕪村が○句であるが、極端な差はなく今も昔で同様に詠まれている季語である。ただ例外は草田男の一八句で、「七夕」や「雛」などとくらべると人間の生活の匂いがより強く漂ってくるように思える。

秋桜子は「七夕」「重陽」「端午」「春祭」などの句が

多い。やはりこれらの季語から見ても日本的、抒情的な秋桜子の句風がうかがわれよう。

誓子には「泳ぎ」の句が二〇句もあって、力動性のある彼の句風の一端をうかがい知ることが出来よう。

以上、季語の変化と俳人の特色をみてきたが、統計的考察にもかかわらず紙面の都合で統計を割愛したのでわかりにくかったと思う。

〔註一〕俳句文学全集「河東碧梧桐篇」東京第一書房
〔註二〕岩波講座日本文学「芭蕉と伝統和歌」太田水穂岩波書店
〔註三〕国文学六月号第八巻第八号「近代俳句と風土」井本農一
〔註四〕国文学第八巻第八号「秋桜子と風景俳句」能村登四郎
〔註五〕角川文庫「中村草田男句集」香西照雄篇解説
〔註六〕新潮文庫「日野草城句集」日野晏子編解説（山本健吉）